

した。また、「食と生活アンケート」(出典：真島康雄著「脳梗塞・心筋梗塞は予知できる」)にて食嗜好をスコア化し、%FMDとの関連を調べた。〔結果〕%FMDは対照群と比較して脳梗塞群のすべてのタイプで有意に低下していた(ラクナ梗塞  $6.0 \pm 2.6\%$ 、アテローム血栓性脳梗塞  $3.9 \pm 1.5\%$ 、心原性脳塞栓症  $4.7 \pm 2.5\%$ )。β値は対照群と脳梗塞群すべてとの間で有意差はなかった。アンケートの結果では、アテローム血栓性脳梗塞において脂質系食物嗜好が他の病型より著明であり%FMDとの間に相関傾向を認めた( $r=0.60$ ,  $p<0.01$ )。〔結論〕対照者と比べて脳梗塞患者の血管内皮機能は低下しており、特に低下していたアテローム血栓性脳梗塞患者では内皮機能と食生活間に関連がある可能性が示唆された。

### 3. 3T MRI を用いた time-SLIP 法による脳脊髄液イメージングの初期経験

(東京女子医科大学<sup>1</sup> 画像診断・核医学科、<sup>2</sup> 画像診断部、<sup>3</sup> 脳神経外科、<sup>4</sup> 東芝メディカルシステムズ株式会社)

阿部香代子<sup>1</sup>・小野由子<sup>1</sup>・小笹雅也<sup>2</sup>・  
竹山 守<sup>2</sup>・藍原康雄<sup>3</sup>・岡田芳和<sup>3</sup>・  
清水誓子<sup>4</sup>・山本貴雄<sup>4</sup>・坂井修二<sup>1</sup>

〔目的〕Time-SLIP法(tSLIP)により脳脊髄液(CSF)動態について検討する。〔対象〕正常ボランティア5例(I群)、中脳水道狭窄症1例(AS)。〔方法〕中脳水道と第4脳室、モンロー孔と側脳室の境界部に選択的IRパルス(Tag)を設定。I群でTagの値によるTag外のCSFと脳実質のsignal変化、全対象でCSFの描出の程度について検討する。〔結果〕Tag=1500~4500msでTag外のCSFと脳実質のコントラストが得られた。ASの術前

では中脳水道から第4脳室にflowがあり、モンロー孔にflowはなかった。第3脳室開窓術後、開窓部、モンロー孔に著明なflowを認めた。〔考察〕tSLIPにより直接的にCSF動態を示すことが可能であり、水頭症の程度や治療法の選択や効果判定などへの臨床応用が期待される。〔結語〕tSLIPによるCSFイメージングの初期経験を報告した。

### 4. ウサギ前海馬台領域の神経線維連絡の解析

(<sup>1</sup> 東京女子医科大学医学部解剖学教室、<sup>2</sup> 東京農工大学大学院農学研究院獣医解剖学研究室)

本多祥子<sup>1</sup>・柴田秀史<sup>2</sup>・藤枝弘樹<sup>1</sup>

海馬体とこれに隣接する海馬周辺皮質との間の神経線維連絡は記憶学習機構に必須の重要な神経経路であり、その基本構成は動物種を越えて概ね保存されていると考えられ、基本モデルとして主にラットで解析されてきた。一方ウサギは海馬周辺皮質領域のサイズが大きく、これらの領域がラットより分化発達していると予想される。そこで本研究はウサギについて、海馬体および海馬周辺皮質の1つである前海馬台の神経結合関係を標識物質注入法で解析し、ラットと本質的な差異があるかを調べた。麻酔下にウサギ前海馬台の様々な位置に順/逆行性標識物質CTB(コレラ毒素Bサブユニット)を注入し、生存期間を置いて脳を灌流固定後、海馬長軸直交断連続切片を作成した。抗CTB抗体を用いて標識細胞を可視化し顕鏡下でプロットした。その結果ラットには見られないCA1から前海馬台への直接投射がウサギでは多量に認められ、ラットとは質的に異なる線維連絡が存在することが明らかになった。ウサギでは記憶学習過程でより複雑な情報処理が行われていると考えられる。